

学校番号	学校名	校長名
22	川崎市立中原中学校	野口 英司

学校教育目標	目指す生徒像	今年度の重点目標
「自主自立の精神を養おう」 (3) 広く社会に目を向けよう (1) 自ら学ぶ力を身につけよう (4) 社会性を身につけよう (2) 互いを認め尊重し合おう (5) 健康な生活を心がけよう	○ 共に学び合う ○ 3年間の自分作りをする ○ 地域社会とともに生きる	◎主体的・対話的で深い学びによる授業改善 ◎ 自己実現の礎となる学びの提供 ◎ 地域の中で活かされる学校

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 学級・学年経営	〈自他を認め、一人一人を活かす学級・学年経営〉 ・リーダーの育成 ・学年、学級活動の充実 ・班活動の活性化 ・諸課題に対する自己解決能力の育成	日常の活動と行事とを活用しながら、生徒の意識向上に努めた。特に学級内の組織作りにおいて力点をおきながら、一人一人を生かすよう計画し実践した。今年度は組織そのもののあり方について反省し、特に委員組織において男女1名ずつという概念を見直す方向性が見えてきた。	次年度より各種委員会の組織作りの際、男女1名ずつが必要な委員会と必ずしも必要のない委員会とを見直し、年度当初より新たな枠組みで組織作りを行う予定である。また、このことをきっかけに学級・学年で現状をさらに見直ししていく。
2 生徒理解	〈生徒理解に基づいた、きめ細やかな心の通い合う指導の推進〉 ・全教職員の人権意識のより一層の向上 ・アンケート調査を生かした教育相談 ・生徒の声を傾聴し心を理解する指導の推進	本校の「学習室」は生徒理解を深める象徴的な立ち位置となった。あらゆる生徒に学校内での居場所を提供するよう全教職員で取り組むことができた。今後の課題としては、それでも学校に登校できない生徒への理解と支援の手立てを講じることである。	生徒理解の根本は教職員の人権意識の向上にあると考え、研修を行い、日々の学校生活の中で研鑽に努めている。今後より一層意識を向上させるために改めて基本に立ち返り、「○○さん」の呼称や、男女の不必要な区別を無くすなどの取り組みを行う。
3 特別活動	〈生徒の自主・自立、共生・協働の精神を培う諸活動の活性化〉 ・生徒会活動の充実と活性化 ・リーダーの育成と生徒中心の行事運営の推進	生徒評議会を中心に「校則の見直し」活動を重点的に行った。この活動を通して生徒の自主自立の意識を向上させ、自らの生活を振り返りながら自律的な生活を旨とするよう指導し成長を支援した。この意識を全校生徒に広げること今後の課題がある。	生徒会活動の柱である生徒評議会の中では十分な討議が行われ、様々な意見が上がった。評議会の中では概ね自律的な意見が多く見受けられたが、これを各学級で討議し、学年・全校へと計画的に推進することが肝要であるため、評議会で成長したリーダーたちがそれぞれの学級においてその力を発揮できるよう教師の支援を継続していく。
4 学習指導	〈主体的・対話的で深い学びの実現〉 ・言語活動の充実、表現力育成、見通しを立て振り返る学習活動 ・資質・能力の育成に活かせる学習評価の実施	今年度も主体的・対話的で深い学びが実践される授業を目指し、校内授業研究、評価研修を行った。授業の中では主体的に課題解決に取り組む場面も増えており、さらにGIGA端末を有効に活用し、効果的に個の学びと集団の学びに取り組む場面もその研究を深めているところである。しかしながら教科として必要な知識を定着させることと生徒の持つ課題解決能力を育成することを両立させるための時間の確保に課題が残る。	教員の働き方改革は単に教員の在校時間の軽減を目指すものではなく、効率効果的に業務遂行する時間を増やすことでもある。また、有効になった時間を教材研究の時間に当てることにより、より魅力ある授業を作り上げることにつながる。そのためには教材の厳選と指導のポイント設定が重要である。その上で、どのような課題を提示するかが重要となってくる。これらのことを教員同士が話し合える時間を設定していく。
5 支援教育	〈インクルーシブ教育の体制整備と充実〉 ・一人一人の生徒の居場所作りを支援する体制の確立 ・あらゆる立場の生徒に必要な支援教育の研修と実践	生徒一人一人を大切にするという意識が教職員間では深く浸透している。その場その場で立場の弱くなる生徒を支援し、居場所を確保する体制が整いつつある。また、校内研修会として臨床心理士の方にインクルーシブ教育について講義していただき、生徒の持つ困り感を共有することができた。これらの取り組みによって教われる生徒がわずかではあるが増加している。課題としては生徒の中にもこのことをより深く浸透させていくことである。	生徒アンケートの結果を分析すると、学年が上がるにしたがって学校生活の中で自分を取り巻く環境を肯定的に改善する傾向が見られる。教育活動と経験が生徒を育てていると分析できる。さらに互いを認め尊重し合う姿に成長させていくことが必要であり、全ての教育活動を通じて「一人一人」の大切さを指導していく。
6 人権教育	〈一人一人の大切さを理解し、共に生きる意識の向上〉 ・教育活動全体を通して「人権」をテーマに横断的な活動の推進 ・拉致被害講演会の実施	人権教育を意識した取り組みは、日常的にあらゆる場面において横断的に取り組んだ。教職員が率先して一人一人を大切にしている姿が最も効果的である。また、今年度は拉致被害者家族の方からの講演会や拉致被害を知るためのパネル展を行い、視野を広げていくことにも取り組んだ。	生徒の持つ純粋な人権意識を大切に育てるためには、日常的にあらゆる場面で取り組むことが必要である。基本的なことではあるが、誰に対しても「さん」をつけて呼びかけたり、他者理解を深めるために場面ごと意識して取り組むことを継続していきたい。
7 職員研修	〈教育公務員としての責務を自覚し、自らの向上に努める〉 ・授業研、研究推進、授業力向上等、学習支援に関する研修 ・学習評価、応急手当等、支援教育に関する研修 ・LGBTQ・防災への理解を深める研修	様々な研修を効果的に行うことができた。中でも評価研修ではそれぞれの教科ごとの具体的な姿を提示しながら精度向上に努めた。また、支援教育研修では、弱い立場に立たされた時の困り感の体験など貴重な経験をした。研修時間の確保については今後も課題となる。	教職員の働き方改革を意識しながら研修時間の確保に努めることが大事である。特に長期休業中の時間をより有効に活用し、教職員の意識・能力の向上に努めていく。
8 保護者・地域との連携	〈保護者や学校協力者への開かれた学校づくり〉 ・PTA、地域教育会議、中原会、同窓会との諸活動の連携 ・学校ホームページの定期的な更新、学校だよりの発行 ・学校教育推進会議による地域連携	コロナ対応が5類に移行したこともあり、諸活動が通常通りにできたと評価できる。この機を利用し、様々な催し等の見直しが出来たことは有意義であった。今後の課題は「教員の働き方改革」について、保護者・地域の理解を得ることにある。	コロナ5類の移行と共に地域の各行事が再開している。その中で学校として協力可能なものと協力困難なものを明確にし、各団体のご理解を得られるよう、機会をとりえて説明していくことが必要である。
9 教員の働き方改革	〈教員が本来業務である授業改善に十分取り組める環境作り〉 ・教員の時間外在校時間を減らすための工夫 ・保護者や地域の理解	教員の本来業務以外の時間を軽減するよう様々な取り組みに着手した。それと同時に教員へも「生徒と同じように自分も大事」という意識を持つよう機会をとりえて語った。今後はより一層、具体的な形で時間軽減を行わねばならない。また、保護者・地域の方々に教員が置かれている状況について理解を深めることが課題である。	ワークライフバランスDayを毎月2日設定し、定着が見られるようになった。教員の意識は少しずつ向上している。また、部活動の在り方や時間を見直し、より良い方向に改善するとともに保護者・地域へは場面に応じて説明を行い、理解を深める。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
学校関係者からの評価としては、本校の人権推進教育に対して概ね好評であり、中学生の活動に対する一生懸命な姿を通して、それを支える学校の努力を認めていただけている。また、ふるさと応援金にも匿名の入金があり、陰ながら学校を支持していただけていることもあった。しかしながら、細かく現状を顧みると登下校の指導であったり、近隣への配慮に欠けた声の大きさなど、地域を大切に育てる心への育成には改善すべき点が多々ある。保護者からも学校教育活動に概ねご理解とご支持をいただいた。	教職員が高い意識と意欲をもって教育活動に取り組むことができた。特にキャリア教育に関してはそれぞれの学年を中心に特色ある教育活動を展開し、生徒が自らの生き方についての意識を深めることができた。また、生徒主体で「学校のきまりの見直し」に取り組み始めた。過去の経緯を確認し、現状を踏まえて自分たちの生活環境を自分たちの手で創り上げていく自律的な活動が継続している。本校教育目標の筆頭に「自主・自立の精神を養おう」とあるが、その言葉を具現化した活動が行われ始めた。次年度はさらに内容を精査充実させ、より効果的・効果的な教育活動を目指していく。